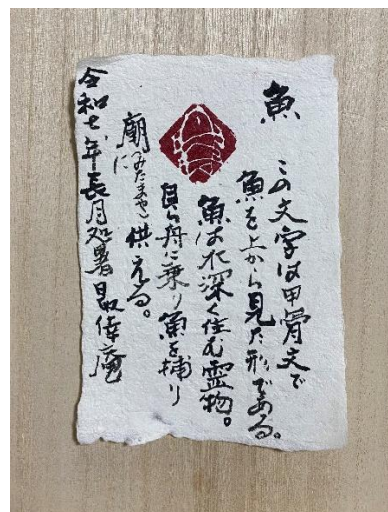
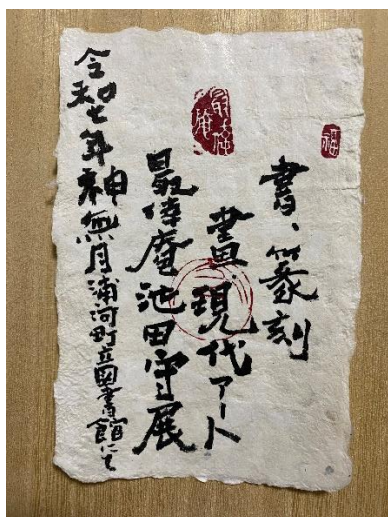


最倅庵 池田守展

令和七年度 浦河町立図書館 読書週間事業

作品ステートメント



作品名：手作り和はがき

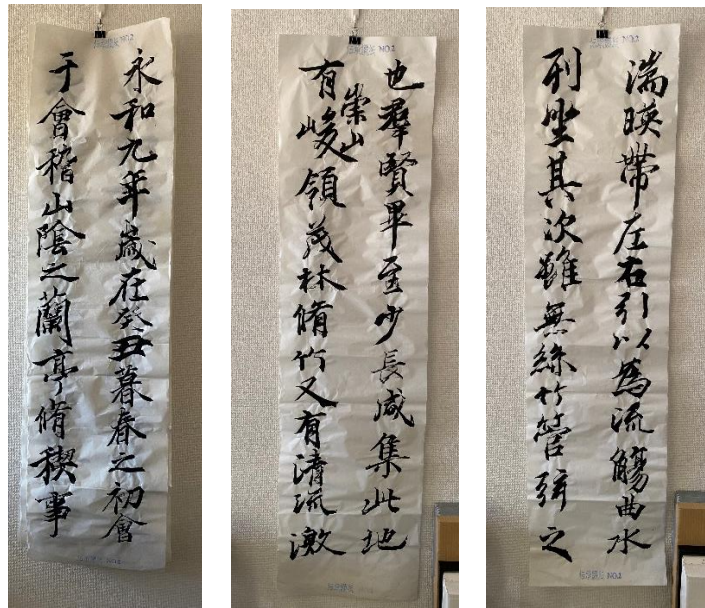
サイズ：150 mm／100 mm（およそのサイズ）

枚数：100 枚

展示場所：受付カウンター前

作品内容：臨書の反故紙（ほごし）を余白のみ利用し手漉きした紙。100 枚作成。

また四季や二十四節などの季節、鮭や馬の古代文字などを篆刻。合計百刻。



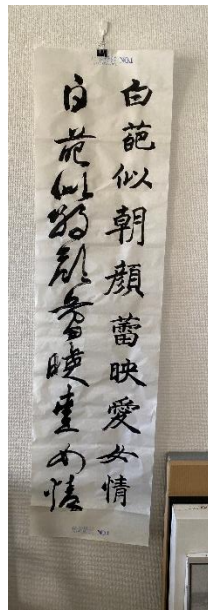
作品名：王羲之 蘭亭序 神龍半印本 全臨 2025 年 9 月作成

サイズ：1360 mm／350 mm（半切サイズ）

枚数：14 枚

展示場所：館内柱

作品内容：王羲之（東晋）の代表作「蘭亭序」は古来より書の最高峰とされ現代書家も臨書を通して書の芸術性を学ぶ対象となっています。



作品名：蕾 2025 年 9 月

サイズ：1360 mm／350 mm（半切サイズ）

枚数：2 枚

展示場所：館内柱

作品内容：AI による漢詩生成。

①入力文章：

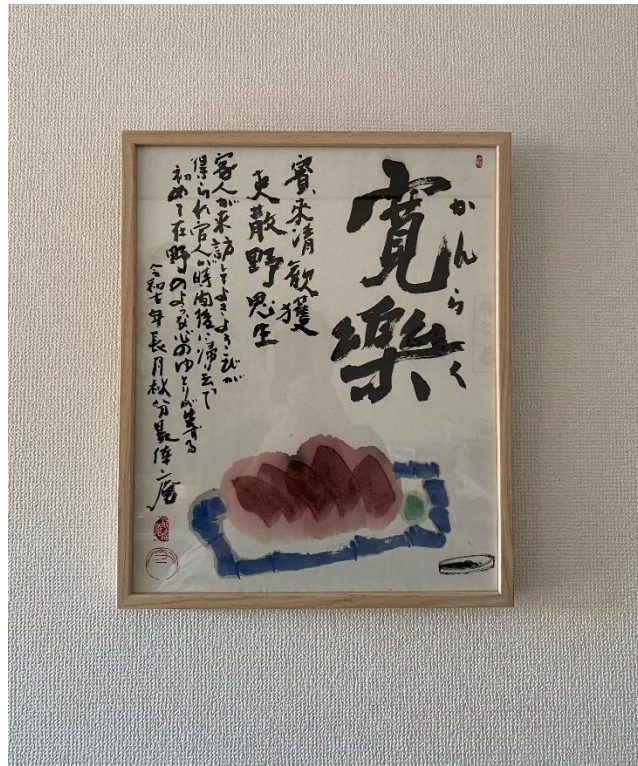
毎日娘と歩いた保育園へ行く道。途中で見た景色が今ではとても懐かしい。その頃は、寒い日も暑い日もおんぶして送って行った。娘と一緒に見た道中に生えている白く小さい朝顔の様な花。蕾時期はよく背中の娘と照らし合わせていた。

②AI 出力漢詩：

園路朝携女，  
寒暑背負行。  
白葩似朝顔，  
蕾映愛女情。

③AI 漢詩解説：

- ・ 園路朝携女：保育園への道を毎朝娘と歩いた情景。
- ・ 寒暑背負行：寒い日も暑い日も娘をおんぶして通ったこと。
- ・ 白葩似朝顔：道中に咲く白い朝顔のような花。
- ・ 蕾映愛女情：つぼみの時期を娘と重ね合わせた愛情深い思い。



作品名：寛樂かんらく

サイズ：424mm／348mm

枚数：1枚

展示場所：階段踊り場

作品内容：

書：

寛樂かんらく

心ゆったりとしたのしむこと

賓来清勸獲。

吏散野思生。

客人が来訪してよきよろこびが得られ、官人が時間後に帰り去って初めて  
在野のような心のゆとりが生ずる。

画：マグロの刺身

落款：令和七年長月秋分最倅庵

落款印：福／最倅庵／守





作品名：野莓のいちご

サイズ：424mm／348mm

枚数：1枚

展示場所：階段踊り場

作品内容：

書：

野莓のいちご

花下班荊酒熟。

松下散策詩成。

花下にいばらをしいて宴を張ったが酒に酔ってきた、松林の中に散歩してやがて詩が出来た。

画：野莓

落款：令和七年長月秋分最倅庵

落款印：福／最倅庵／守



作品名：間曠かんこう

サイズ：379mm／288mm

枚数：1枚

展示場所：階段踊り場

作品内容：

「間曠」とは、もの静かでゆるやかな気配を意味する。

本作においては、漆黒の墨と青の彩墨を混色し、筆致の瞬間に生じる両者のせめぎ合いを可視化している。墨線は単なる記号的な線を越え、内包する用筆の動きが肉質的な存在感を生み出し、静寂の中に潜む力動を浮かび上がらせる。

特に筆を入れる瞬間における黒と青の交錯は、表層的な対比を超えて奥行きを帯び、作品全体に深遠な響きを与えている。その緊張と緩和の曖昧さが「間曠」の精神が宿り、見る者を静寂で広がりのある時間へと誘う。

落款：令和七年長月秋分最倅庵

落款印：最倅庵



作品名：SAKURA 墨象

サイズ：610mm／460mm

枚数：1枚

展示場所：階段踊り場

作品内容：SAKURA 墨象」は、ある日の偶然の再会から生まれた。

かつて共に過ごした旧友と再び会うことで、過去の時間とともに幼少期の原風景が蘇り、その情景を桜を通じて描きたいと感じた。また、再会によって感じた懐かしさや、再び繋がる縁を桜に重ね、墨の表現を通じてその儚くも、けれども確かな感情を表現しようとした。

桜の幹を力強い漆黒の墨線で描き、人生におけるいくつかの選択や分岐点、そして出会いの重みを表した。

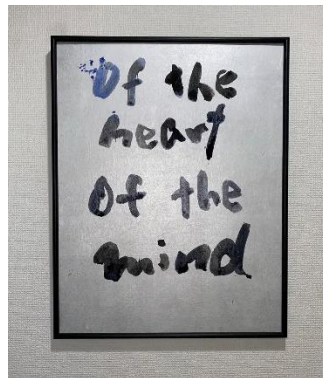
一方、淡墨で描かれるスクエアとその周りの部分には、過去と現在が交錯する中で時に揺れる感情や、人がぶつかる内面的な壁を表現した。

下方に流れるように落ちていく、満開から散りゆくまでの桜の一連の姿は、私たちが抱える思い出や、人間同士が共有する時間の儚さと深さを映し出す。

作品全体に流れるその「櫻」「さくら」「サクラ」のさまざまな書かれた文字群は、ただ桜の色や花びらの形を示したにとどまらず、人生の移ろいと共に成熟していく友情や人間関係の象徴として書いた。

友人とのこの一瞬の再会が、記憶の中で年に一度咲く桜のように鮮明に残ることを願い、タイトルを「SAKURA 墨象」とした。

私の周りの原風景と、成長する人間同士の友情を、一年に一度しか咲かない花に喩えた作品。



作品名：of the heart of the mind

サイズ：510mm／395mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

本作は、墨によって「of the heart」「of the mind」と記した作品である。

「of the heart（心の）」と「of the mind（頭の）」は、英語圏においては明確に対比される概念であり、西洋に根ざす二元論的思考——すなわち感情と理性の分断——を色濃く反映している。「heart」は感情、直感、愛、情熱といった情緒的側面を、「mind」は思考、理性、知性、意識といった論理的側面を象徴し、それは“follow one's heart（心に従う）”や“make up one's mind（決心する）”といった慣用表現にも顕著にあらわれている。

対照的に、日本語の「心」は、これら両義的な意味を内包する多義的な語である。「心を決める」は理性的な決断を、「心が温まる」は感情的な動きを表すように、「心」は東アジア思想——特に仏教や儒教の影響——のもと、感情と理性を分け隔てず、統合された精神性を指し示す語として機能している。

このような言語的・文化的な差異は、書という表現形式においても看過できない。書の筆勢は、知性と感情、意識と無意識といった相反する要素のせめぎ合いの中に生まれる。書家が筆を持ち、墨をつけ、一気に書き上げるその行為は、理知的構造と情動的衝動が交差する瞬間における身体的表出である。

本作は、西洋と東洋の「心／mind」観の差異を手がかりに、翻訳不可能性そのものを問う試みである。意味の揺らぎのなかに浮かび上がる文字は、感情と理性、知と感覚を往還しながら、自律的な身体運動としての書と、言語の限界を超える視覚表現としての書の可能性とを探求している。





作品名：こころの

サイズ：510mm／395mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

本作《こころの - of the heart》は、箔を基材とし、墨を主素材に制作された作品である。

墨には主に黒と青が交錯するような滲み、筆致の表情に微細な揺らぎが生まれている。

日本文化において「心」という語は、古来より深い精神性や共感、他者との内面的なつながりを象徴してきた。そこに接続詞的な役割を担う「の」を加えることで、「心に属するもの」「心が抱える何か」を暗示する構造となっている。

「こころの声」「こころのこもった」といった用例にも見られるように、感性と言葉の間に柔らかで、次の世界への導線を生む。

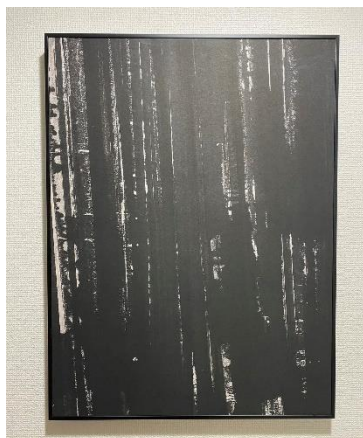
本作においては、この「こころの」という語を筆で記した上に薄紙を重ね、さらにその中央を意図的に破るという手法が取られている。

これは、あえて“心の内側”を覗き見するという行為の視覚的象徴であり、普段は覆い隠されている感情や内的世界に触れようとする試みでもある。

箔という素材がもたらすわずかな反射と、墨の濃淡、そして破られた紙の裂け目が織りなす空間は、表層と深層、可視と不可視の行き来する装置として機能している。

そこには、心の揺らぎ、記憶、再生といった多層的な意味が込められている。

本作は、観る者に感情的な共鳴とともに内省を促し、作品との対話を通じて「心とは何か」という根源的な問いを呼び起こす。視覚的体験と心理的体験が交差するこの場において、作品は単なる視覚芸術の枠を超え、精神的な探求の契機として存在している。



作品名：one way

サイズ：610mm／460mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

書にの一回性の原則に対して、完成を目指す過程で一回性を何度も繰り返すことに、自己矛盾を感じることもある。

筆を入れるその瞬間が、書の根本にある「唯一無二」であるべきだ、という伝統的な考え方に対し、その唯一性を求めて何度もやり直す矛盾。

この矛盾を受け入れながら、あえてその「一回性」に執着する行為は、単なる作業の繰り返しではなく、自分の内面と向き合い、表現に近づこうとする精神的なプロセスであると考えた。

制作のたびに、完成形を模索しながらもどこか不完全であり続けること。その反復の先に何があるのかを探求する意味で、この作品は「one way」というタイトルを冠した。



作品名：one way

サイズ：1600mm／800mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

書にの一回性の原則に対して、完成を目指す過程で一回性を何度も繰り返すことに、自己矛盾を感じることもある。

筆を入れるその瞬間が、書の根本にある「唯一無二」であるべきだ、という伝統的な考え方に対し、その唯一性を求めて何度もやり直す矛盾。

この矛盾を受け入れながら、あえてその「一回性」に執着する行為は、単なる作業の繰り返しではなく、自分の内面と向き合い、表現に近づこうとする精神的なプロセスであると考えた。

制作のたびに、完成形を模索しながらもどこか不完全であり続けること。その反復の先に何があるのかを探求する意味で、この作品は「one way」というタイトルを冠した。



作品名：flowing

サイズ：510mm／395mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

川や海の流れは、途切れることなく続くものであり、動きの中に力強さと静けさが共存するものである。

私たちの日常の中で意識しづらい、しかし確実に流れている自然のリズムがそこにある。この作品ではまず、そのリズムを視覚化し、青と黒という自然の中から取り出した二色のせめぎ合いを通じ、その奥に潜む「時間」の経過を表現したいと考えた。

青は、自然の無限に続くサイクルや、絶え間なく移り変わる季節の流れを象徴する。青の色調が持つ静謐さと奥深さは、自然がもつ悠久の時間と調和し、その中で時が静かに積み重なっていく様子を表す。

一方、黒は瞬間的に変化し、流動する力強さと儚さを表現し、私たちが日々体験する一瞬一瞬の変化や、予測できない事象の連続性を示すものとして書いた。この二つの色は、互いに対照的でありながら、流れるような調和を生み出すものだと、まずはそこに着目した。

書道自体もそもそもが時間芸術であり、墨の流れや筆の動きは時間と共に変化していく過程を示すものだ。

この作品は、筆が紙の上を滑るその瞬間瞬間を通して、動きと色が生み出す重なりと、そしてその対比により、無限に続く自然の営みと一瞬の儚さの対話を形成させたいと考えた。書とはそんな一瞬の出来事なのだと。

すなわち、古来から続く書道が持つ根源的な美が今のこの瞬間まで「flow」し、さらに現代的な視点から、色と動きによる表現が交差するのだ。

本作の着地点はそこにある。自然が持つ無限のサイクルと、人間が感じる瞬間の大切さを象徴させるものとしてここに定着したのである。





作品名：定着と変容

サイズ：728mm／515mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

本作は、書における「余白と筆跡の関係性」、および「墨の物質性」を探求する試みである。

筆を用いることなく、光と影の作用によって「二人」と読むことができる構成を採用した。切り抜かれた二本の線と、貼り付けられた二本の線を対照的に配置することで、書における筆跡と支持体（紙・空間）の関係を拡張し、墨の物質性を強調している。

書の本質的な要素のひとつに、墨を用いた文字の記述がある。しかし本作では、墨を「書く」ためではなく、「接着」の手段として用いた。上部の二本の線は、裏側に画仙紙を墨で貼り、下部の二本の線は、上部から切り抜かれたものを同じく墨で固定している。この行為は、墨の「定着」と「変容」を象徴する。また、切り抜かれた線を「人」として配置することで、書における筆致の一回性とも共鳴させている。

本作の根底には、「墨の定着と時間」という概念がある。約2000年前に記された墨書が今なお痕跡を留めているように、墨は時間を超えて存在し続ける。しかし本作における墨は、「書く」のではなく「貼る」ために用いられた。この墨は、時間とともに紙と融合し定着するのか、それとも剥離し、変容していくのか。その過程そのものが、書の本質にある偶然性や一回性と響き合うのである。

「人」とは、単なる個としてではなく、関係性のなかで存在するものと言える。他者とのつながりや、その不在を通じて初めて輪郭を現す存在であり、人は決して一人では完結しない。誰かと関わり、影響し合い、時には別れや喪失を経験することで、その本質が浮かび上がる。本作は、線と余白の関係を通じて、書が持つ空間性と構造のバランスを問い直すとともに、墨の物質性と時間の流れを可視化し、書の根源的な在り方を再考する試みである。そして同時に、現代における人間関係のあり方をも問うものである。



作品名：心を重ねて

サイズ：728mm／515mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

本作は、日本語における「心」という語が内包する多層的な意味を探求している。日本人の思考と感情の領域には、常に二重性や矛盾が存在しているのではないだろうか。人々はその不一致に苦しむ一方で、同時にそこに遊びや余白を見出し、むしろ楽しむ傾向さえある。

制作においては、紙を切り抜き、重ねるという行為によって「心」という文字を抽象化した。筆による線の痕跡ではなく、余白の操作と陰影の関係性が、心の不一致と重なりを視覚化している。浮かび上がる「形」と沈む「影」とが交錯することで、表と裏、内と外、真と偽といった対立的な関係が一枚の画面の中に同居する。

「心」は決して一枚岩ではなく、常に多義的で揺れ動く存在である。その揺らぎこそが日本人の精神文化を支えてきた。本作はその不安定さを否定するのではなく、むしろ肯定し、矛盾や重なり合いをひとつの美として提示する試みである。



作品名：円環

サイズ：605mm／454mm

枚数：1枚

展示場所：地下1階

作品内容：

本作は、緑の淡墨による円環を「満月」として想起させるものである。

だがその意図は、単なる天体の描写にとどまらない。

人間の象徴的思考に深く結びつく「円」という形態を、自然界の循環性と歴史的連続性を併せ持つ二面性である。自然界に無数に見出される円のなかでも、満月ほど「完全性」を可視化する存在は稀である。

人はその完璧な形態に魅了されつつも、同時になんとも言い難い畏怖を覚える。この「美と恐怖」の二重性こそが、古代以来、月が神話や信仰の中心的象徴であり続けた理由の一端であろう。紀元前の金文にはすでに「月」が刻まれている事実は、人類が太古よりこの反復する周期に向き合い続けた文化的記憶である。

本作で用いた緑の淡墨は、中国五色の系譜から採用し、五行思想における「木」を象徴する。「木」(緑)は生成と循環の始まりを担う原理であり、その痕跡は墨の偶然的な滲みや飛沫と共鳴する。したがって、本作の円環は、意識的に「完全な円」を志向する過程で起きる東洋的な「不完全の美」(侘び寂び)と、西洋的な「完全性の理念」とのあいだに張りつめた緊張を生み出すのである。

つまり、満月を見てその美しさに魅了されつつ、時として畏怖を感じ、息を潜め足を止めてしまうその何かは、満月の一回性と連続性の間の始まりと終わりが重なり合う、正にエネルギーが最高潮となっているからだろう。